

# 国語問題

はじめに、これを読むこと。

(注意事項)

1. この問題用紙は二十ページまでである。
2. 解答用紙の所定の欄に、必ず氏名を記入すること。
3. 解答用紙には受験番号が印刷されているので、受験票と照合して受験番号が正しいかどうか確認すること。
4. 解答はすべて「解答用紙」の解答欄に記入またはマークすること。解答欄以外のところには何も記入しないこと。
5. 解答は、必ず鉛筆またはシャープペンシル(いずれもHB・黒)で記入すること。
6. 訂正は消しゴムできれいに消し、消しくずを残さないこと。
7. 解答用紙は、絶対に汚したり折り曲げたりしないこと。
8. 文字は一点一画まで正確に書くこと。
9. 解答用紙は持ちかえらないこと。
10. この問題用紙は必ず持ちかえること。
11. 試験時間は六〇分である。

(マークの記入例)

良い例	悪い例
	  

(一) 次の文章を読み、後の問に答えよ。

少し前に高知県の経済同友会の方々に呼ばれて今後のコミュニティや地域再生のあり方についてお話をさせていただく機会があった。同会は、高知が10年後に目指すべきトータルビジョンとして「日本一の幸福実感県・高知」の実現を掲げ、独自の幸福度指標「GKH(グロス・コウチ・ハピネス)」の検討を既に進めている。

高知県は県民所得といった指標では日本の中でもっとも下位に位置しているが、森林など自然環境の豊かさや一次産品、コミュニティ的なつながりなど、既存の指標では測れないローカルな「豊かさ」を再評価しつつ、新たな「土佐」的社会的あり方を具体的な政策とともに構想するものだ。

もちろんGKHはブータンのGNH(Gross National Happiness、国民総幸福量)に触発されたもので、同会はブータンの首相らを招いたり訪問したりする活動も並行して進めている。

ブータンのGNHに触発された自治体レベルの動きという点では、最近ではかなり知られるようになった東京都荒川区の「GAH(グロス・アラカワ・ハピネス)」の試みがある。私も多少の関わりがあり、都市―農村ないし中央―地方という座標軸から見ればある意味で高知とは対照的なポジションの地域だが、同区は独自のシンクタンクを設立して具体的な指標作りを進めるほか、その一環として子どもの貧困問題などに関する調査研究や政策対応に取り組んでいる。

荒川区や高知県に続いて、全国の自治体や団体が「GOH」という試みを始めていくと收拾がつかなくなるのではと思わなくもないが、大事なことは、GDPやGNPという一元的な座標軸から人々の意識や行動、「豊かさ」についてのイメージ、そして政策が解放されていくことだろう。

つまり「GDP」は一つであっても、「GOH」の内容は多様なのである。その意味で、ポスト成長時代の社会――私自身は「定常型社会」と呼んできた社会――とは、人々が一つのものさし、あるいは社会全体を一つの方向に駆動するような大きなベクトルから解放されて自由になり、一人ひとりがそれぞれの創造性や多様性を発揮し楽しんでいく社会であるはずだ。そうした

方向に向けた「新しい風」は、今確実に全国各地で吹き始めていると思う。

ところでいま幸福に関して述べているが、世界の様々な幸福度指標ないしそのランキングにおいて、現在の日本はずいぶん低い位置にある。たとえばミシガン大学の世界価値観調査では43位、イギリスのレスター大学の「世界幸福地図(World Map of Happiness)」では90位という具合に。

こうした点については近年様々に議論がされるようになり、また、幸福度や主観的な生活満足度といったものについては、文化差といった要素もあるため単純な国際比較は難しく、この種のランキングを額面通り受け止めることについては慎重であるべきことは確かである。

ただし、そうした点はひとまず置いた上で、ここでは以上のような幸福をめぐる最近の状況に比べて意外に知られていない事実に注目したい。それは江戸時代の末期から明治の初めにかけて日本を訪れた外国人が、上記のような現在のランキングとは対照的に、口をそろえて「日本人ほど幸福に見える国民はない」という指摘を行っている点である。

たとえばアメリカの初代総領事ハリスは次のように述べている。「彼らは皆よく肥え、身なりもよく、幸福そうである。一見したところ、富者も貧者もない。——これが恐らく人民の本当の幸福の姿というものだろう。私は時として、日本を開国して外国の影響を受けさせることが、果してこの人々の普遍的な幸福を増進する所以であるかどうか、疑わしくなる」と。

またイギリス人の詩人・ジャーナリスト、エドウィン・アーノルドは、日本の街の様子について、「これ以上幸せそうな人びとはどこを探しても見つからない。喋り笑いながら彼らは行く。人夫は担いだ荷のバランスをとりながら、鼻歌をうたいつつ進む。遠くでも近くでも、『おはよう』『おはようございます』とか、『さよなら、さよなら』というきれいな挨拶が空気をみたく述べている。

もう一つ加えると、工部大学の教師をつとめたイギリス人ディクソンは次のように言う。「ひとつの事実がたちどころに明白になる。つまり上機嫌な様子がゆきわたっているのだ。……西洋の都会の群衆によく見かける心労にひしがれた顔つきなど全く見られない。頭をまるめた老婆からきやつきやつと笑っている赤児にいたるまで、彼ら群衆はにこやかに満ち足りている」。

これらはほんの二、三の例に過ぎず、こうした観察は枚挙に暇がない。

江戸時代末期ないし明治初めの日本についての以上のような外国人の言明を聞いて、あたかもそれらが、現在の日本人(あるいは外国人)がブータンについて語る内容とよく似ている、と感じる人は少なくないだろう。そして、「当時の日本人についての外国人の言明も、現在のブータンを過度に美化するような見方も、いずれも外部からの表層的な観察に過ぎず、実質的なものではない」という把握もありうるだろう。

ただひるがえって思うに、私自身がずっと感じてきたことだが、特に海外から帰国したりした時に、東京での地下鉄の車内などで、ともかく人々の表情が暗く、疲れているように見え、また他者に対して無関心ないし「閉じている」という印象をもってしまうことは否めない。

ちょうど上記のデイクソンの「西洋の都会の群衆によく見かける心労にひしがれた顔つき」という言葉が思い浮かぶが、当時から百数十年をへて、ちょうど状況が逆になっているのである。こうしたことからすれば、現在の日本を訪れる外国人が、「日本人は世界でもっとも幸福な人々に見える」と記すことはあまりないのではないか。

私は江戸時代の日本が理想的な社会であったとか、江戸時代に日本が戻るのがよいと考えているわけでは全くない。また、これまで様々な形でなされてきた「江戸時代暗黒論」と「江戸時代理想論」をめぐる議論をここで行うつもりはない。しかし以上のように考えていくと、江戸末期や明治初期における外国人の観察は、日本社会が何を失ってきたかに思いを馳せたり、幸福や豊かさの意味について考えたりする際の手がかりにはなるように思われる。

おそらく当時の日本においては、少なくとも現在よりもはるかに大きな「時間的・空間的(プラス精神的)なゆとり」が社会にあったことは確かであり、そうしたことが地域における様々な人と人とのコミュニティ的なつながりを可能にしていたのではないだろうか。

関連して付け加えると、当時のヨーロッパからの来訪者が口をそろえて言っていることとして、ヨーロッパ(やアメリカ)の人々に比べて日本人がいかに「のんびり」しており、また仕事も最小限のことしかしようとしないう点がある。

たとえばある外国人は「日本人の悠長さといったら呆れるくらいだ」と述べ、また『日本周遊記』という当時広く読まれた本を公刊したスイス領事のルドルフ・リンダウは、「仕事に対する愛情は日本人にあつては、誰にでも見られる美德ではない。彼らうちの多くは、いまだ東洋に住んだことのないヨーロッパ人には考えもつかないほど不精者である」と述べている。

こうした観察は次のような意味で非常に興味深い。

すなわち私たちは現在、ヨーロッパを訪れたときの一般的な印象として、「あくせくした」日本に比べてすべてがのんびりしており、そこでは「ゆつくりと時間が流れている」ことを感じる。また、「日本人はもともと仕事好きで、労働に対する価値観がそもそもヨーロッパの人たちとは違う」などといった言い方をする人も少なくない（私の印象では団塊の世代か多少それより上の世代の人などに多い）。

しかし江戸末期や明治の初め頃には、ちょうどそれと「逆」のことが、日本とヨーロッパについて対比的に言われていたのである。

ではその変化を生んだ要因は何だったのだろうか。

江戸末期や明治初めの日本社会あるいは日本人は、まだ人口増加あるいは富国強兵・経済成長といった「拡大・成長の急な坂道」を登っていく、その手前にいた。しかしその後、百数十年にわたり、そうした上昇の坂道を登り続けることが「習性」となり、「いつも忙しく動き回っていること」や「仕事中毒であること」が「日本人の属性」であるかのような「通念」や「神話」が形成されていったのである。

## I

さらに大きな視野で議論を進めていこう。

日本は2005年から既に人口減少社会に入っている。ちなみに江戸時代後半の人口はほぼ3000〜3300万人で安定しており、江戸時代は明らかにひとつの「定常型社会」であった。ただし、それは「農業を基盤とする」定常型社会であり、その限りでは現在のブータンと類似した面があり、そしてまたそこで一定の豊かさや幸福が実現していたのである。

## II

このように考えていくと、現在の日本にとってのもっとも本質的な課題は、一言で言えば「産業化文明をへた後の定常型社

会をいかにして実現できるか、という点にあると言ってよいだろう。そして21世紀半ばに向けて、人口減少と人口高齢化における「フロントランナー」として世界の先頭を走ることになる日本としては、ある意味でそうした新たな定常型社会（Ⅱ）ポスト産業化時代の定常型社会の実現を先導し、発信していくことが、世界史的な使命であると言っても過言ではない。

### Ⅲ

ここで、話題をさらに大きく広げれば、人間の歴史を「拡大・成長」と「定常化」という視点でながめ返すと、そこに3つの大きなサイクルを見出すことができる。①人類誕生（約20万年前）から狩猟・採集時代、②約1万年前の農耕の成立以降、③約2000～3000年前以降の産業化（工業化）時代の3つで、これは人口の増加と定常化のサイクルとも重なる。

そして、いささか議論を急いで私自身の仮説を記すならば、それぞれの段階の「前半期」が「物質的生産の量的拡大」の時代だったとすれば、それぞれの「後半期」は「内的・文化的な発展」と呼べるものが前面に出る時代だったと言えるものと思われる。すなわち、狩猟・採集段階においては、およそ5万年前に「心のビッグバン」ないし「文化のビッグバン」と呼ばれる現象が起こり、装飾品、絵画や彫刻などの芸術作品のようなものが一気に現れるようになる。生産の量的拡大から文化的な発展への移行と、いつてよい変化である。

また農耕段階においては、今から約2500年前（紀元前5世紀前後）に、哲学者ヤスパースが「枢軸時代」、科学史家の伊東俊太郎が「精神革命」と呼んだ現象、つまり何らかの普遍的な原理を志向する思想が地球上の各地で「同時多発的」に生成するという現象が起こる。インドでの仏教、中国での儒教や老荘思想、ギリシャ哲学、中東での旧約思想だが、これらは共通して、人間にとつての内的あるいは根源的な価値や「幸福」の意味を説いた点に特徴がある。

### Ⅳ

さらに興味深いことに、最近の環境史などの研究から、当時つまり紀元前5世紀前後のギリシャや中国などにおいて森林破壊などの問題が深刻化していたことが明らかになってきている。先ほどの狩猟採集社会における「心のビッグバン」期も含めて、そこで起こったのは「物質的、生産の量的拡大から、内的・文化的発展へ」という転換だったのではないだろうか。

いずれにしても、以上から示唆されるように、現在の私たちが直面しているのは人類史の中でのいわば「第三の定常期」への移行という大きな構造変化である。

そして歴史が示しているように、定常期とは文化的創造の時代に他ならない。

加えて、成長・拡大の時代には世界が一つの方向に向かう中で「時間」軸が優位となる——たとえば「東京は進んでいる、田舎は遅れている」「アメリカは進んでいる、アジアは遅れている」といった具合に。

しかし私たちが迎えつつある定常化の時代においては、そうした一元的な時間軸の尺度が背景に退き、むしろ「空間」や「地理」が前面に出るようになり、各地域の風土的・歴史的な多様性や固有の価値が再発見されていくだろう。成長・拡大期が「地域からの離陸」の時代だったとすれば、定常期は「地域への着陸」の時代なのである。

本節の前半で、江戸末期や明治初めの日本に関する外国人の観察について述べた。最後にもう一つ似たような例を記すと、それは20世紀における世界の都市計画に大きな影響を与えた「田園都市（ガーデン・シティ）」の考えに関することである。

意外なことに、20世紀初めに田園都市のビジョンを唱えたイギリスのハワードやレイモンド・アンウィンといった人々は、実は当時の日本の都市・地域のありようを実現すべき理想像のひとつとして思い描いていた。

アンウィンは日本について「春になると桜の木々の下に人々がくり出して賑やかに過ごす」と記し、それが他ならぬ「田園都市」のイメージと重ねられたのである。アンウィンのこの後の文章は「もしも私たちに同様のことができるのなら……」という趣旨で展開されていく。

これは決してノスタルジーではない。日本は人口減少社会に移行したが、これからの50年は、高度成長期に起こったこととちよほど「逆」の現象が生じていくだろう。たとえば1970年代に郊外の田んぼが住宅地に変わっていったのが、今後空き地・空き家や緑地・農地等に再び戻っていくといったように。

そうした中で、私たちは必ず「A」に復帰できるか否かの分水嶺に様々な形で向かい合っていくことになる。かつて日本とともにイメージされた「田園都市」もまた、私たちの対応次第で、そうした「A」<sup>1</sup>として再び実現されていく可能性をもっている。

定常型社会における豊かさや幸福の手がかりは、遠い彼方にあるというよりは、私たちに身近なローカルな場所や古くからの

風景、あるいはそれらへの愛着といったものの中に含まれているのではないか。「成長」の旅の果てにたどり着いた場所で発見したものは、いわばもといた場所の大切さであり、あるいはもといた場所そのものであり、私たちはそこへと回帰しつつもう一度出発していくことになるのである。

(広井良典『人口減少社会という希望』による)

問一 傍線 a「そうした方向に向けた『新しい風』は、今確実に全国各地で吹き始めていると思う」とあるが、その「新しい風」の説明として最も適切なものを次の中から一つ選び、その番号をマークせよ。

- 1 既存の指標では測れなかったローカルな「豊かさ」を、GDPやGNPの中に組み込んで測定できるようにしようとする動き。
- 2 都市―農村、中央―地方という座標軸において対照的なポジションにあるものを、独自の観点から統合して新たな指標を作ろうとする動き。
- 3 社会全体を駆動する一元的な座標軸から解放されて自由になり、一人ひとりが多様な豊かさや幸福を追求できる社会を作ろうとする動き。
- 4 各自治体の試みに收拾がつかなくなることがないように、トータルなビジョンとして、コミュニティや地域再生のあり方を考えようとする動き。
- 5 子どもの貧困は、県民所得のような既存の指標に拘泥することで生ずる問題であると位置づけて、新たな観点から調査研究し、対応しようとする動き。

問一 傍線b「ちょうど状況が逆」、および傍線c「ちょうどそれと『逆』とあるが、「逆』であるとはどういうことか。その説明として最も適切なものを次の中から一つ選び、その番号をマークせよ。

1 現在の日本は、世界の幸福度指標ないしそのランキングにおいて、日本人の実感とは逆に、低い位置にあるが、単純な国際比較は難しいので、この種のランキングを額面通りに受け止めるべきではない。

2 江戸時代末期ないし明治初めに西洋人が西洋の都会の群衆について語った内容は、現在のブータンについて語られる内容とちょうど逆であるが、いずれも外部からの表層的な観察に過ぎず、実質的なものではない。

3 江戸時代末期ないし明治初めに西洋人が日本人について抱いた印象は、現在の東京の地下鉄の車内などの人々から受ける印象と逆だが、これは幸福度の基準が変容したことによるので、江戸時代を理想化すべきでない。

4 現在、「あくせくした」日本に比べてヨーロッパは「のんびり」していると感じる日本人は多いが、百数十年前は逆の状況だったので、日本人の労働に対する価値観がもともとヨーロッパ人と異なるというわけではない。

5 江戸時代末期ないし明治初めと、現在とでは、ヨーロッパ人と日本人が相互に抱く印象が逆転しているが、それは当時のヨーロッパからの来訪者が日本を美化したためなので、現在のヨーロッパの方が日本より幸福だというわけではない。

問二 傍線d「変化を生んだ要因」とあるが、筆者はその要因は何だったと述べているか。最も適切なものを次の中から一つ選び、その番号をマークせよ。

1 上昇の坂道を登り続けたため、もともと持っていた労働に対する価値観が強化されたこと。

2 百数十年にわたる拡大・成長の時代を経験したことで、常に忙しく働くことが習慣化したこと。

3 開国によって外国の影響を受け、幸福の増進のために時間的・空間的・精神的なゆとりを犠牲にしたこと。

4 人口増加と富国強兵・経済成長の時代を経たため、根源的な価値や幸福の意味を考えるようになったこと。

5 都会化によって心労が大きくなり、他者への関心をなくしてコミュニティ的つながりが希薄になったこと。

問四 波線アおよび波線イ「定常型社会」とあるが、その「定常型社会」についての筆者の考えとして最も適切なものを次の中から

一つ選び、その番号をマークせよ。

1 人口減少と人口高齢化において世界の先頭を走ることになる日本は、第三の定常型社会への移行を先導し、発信しているかなければならない。

2 江戸時代は現在のブータンと同様、一種の定常型社会であったが、農業を基盤としていたため、そこでの豊かさや幸福には一定の制約があった。

3 日本は21世紀半ばに向けて、人口を回復させつつ新たな産業化文明を模索する、第三の定常型社会を早期に実現することが世界史的な使命である。

4 狩猟採集社会や農耕社会の後の定常型社会は、内的・文化的な発展を示したが、ポスト産業化時代の定常型社会は、環境破壊への対応が鍵となる。

5 人類史的に見ると、物質的生産の量的拡大によって文化的創造への関心が生まれて初めて、定常型社会への移行という構造変化が生じると言える。

問五 傍線 e「成長・拡大期が『地域からの離陸』の時代だったとすれば、定常期は『地域への着陸』の時代なのである」とはどのようなことか。その説明として最も適切なものを次の中から一つ選び、その番号をマークせよ。

1 成長・拡大の時代には、地域固有の多様な価値観が物質的生産の量的拡大に寄与するが、定常化の時代には、内的・文化的発展に寄与する。

2 成長・拡大の時代には、時間軸が優位となり、たとえばアメリカとアジアの地域差が目立つが、定常化の時代には、地域差は問題にならなくなる。

3 成長・拡大の時代には、成長という一元的な座標軸が重視されて、地域性は無視されるが、定常化の時代には、地域性を活かすことが成長につながる。

4 成長・拡大の時代には、田舎は東京のようになることを目指して成長を志向するが、定常化の時代には、むしろ東京が田園都市を目標とするようになる。

5 成長・拡大の時代には、一元的な時間的尺度の中での発展段階に関心が向けられるが、定常化の時代には、そのような関心は薄れ、地域の個性が再発見されていく。

問六 傍線f「これは決してノスタルジーではない」とはどういうことか。その説明として最も適切なものを次の中から一つ選び、その番号をマークせよ。

- 1 日本の高度成長期は、懐かしんであこがれるべき状況にあつたわけではなく、田んぼが住宅地に変わるなど、自然が失われていくプロセスであつた。
- 2 日本は、今後、高度成長期と逆の過程をたどっていくので、田園都市は、単に懐かしむだけの過去のイメージではなく、現実の未来の姿となり得る。
- 3 日本はすでに人口減少社会に移行し、空き地・空き家や緑地・農地等が増えていくので、都市のあり方は過去の問題などではなく、現在の問題である。
- 4 20世紀初めの日本の都市や地域のありようは、イギリス人にとっては郷愁を誘うものだったが、日本人にとっては、特段懐かしさを覚えるものではない。
- 5 田園都市の考え方は世界の都市計画に大きな影響を与えたが、当時の日本の田園都市的社會は、遠い過去ではなく、今も人々の暮らしの中に息づいている。

問七

空欄

A

に入る言葉として最も適切なものを次の中から一つ選び、その番号をマークせよ。

- 1 そぐわしい過去
- 2 つつましい過去
- 3 名残惜しい現在
- 4 なつかしい未来
- 5 いとおしい未来

問八 本文からは次の一文が脱落している。入るべき個所は本文中の I V のどこか。最も適切なものを次の中から一つ選び、その番号をマークせよ。

これは、物質的なものを超えた「幸福」への関心という点を含めて、私たちが生きる現在、つまり産業化社会における拡大から定常への移行期と構造的によく似ている。

1 I

2 II

3 III

4 IV

5 V

問九 傍線 g「成長」の旅の果てにたどり着いた場所で発見したものは、いわばもといた場所の大切さであり、あるいはもといた場所そのものであり、私たちはそこへと回帰しつつもう一度出発していくことになるのである」とは、どのようなことか。本文に即して五十字以内(句読点を含む)で説明せよ。

(二) 次の文章を読み、後の問に答えよ。

ラフカディオ・ハーンは日本人の表情について鋭い観察をのこした人である。彼があるとき三人の婦人と汽車に乗りあわした。彼女らは左の袂<sup>イ</sup>で顔をかくし、こくりこくり居眠りしている。それは「まるで流れのゆるい小川に咲いている蓮の花のようだ」(『心』平井呈一訳)とハーンは書いている。

寝顔が美しいかどうか、それは当人にはわからない。当人にわかっていることは、ひよつとすると不用意な顔をみせるのではないかということだ。不用意に自分の表情をさらけ出す、これがこまったことなのだ。少なくとも昔の女性のたしなみにはなかったことだ。

袂で顔をかくすというのは、時には愁いを時には恥かしさを、つまりはあらゆる表情をひとに見せまいとするしぐさであって、このしぐさが伝統的なつつしみの表現であることはいままでもない。

和服姿のめつきり少なくなった当今、——それも「晴れ姿」のみで、着つけもろくにできない娘たちが、袂の袖で顔をかくすかどうか、そのようなことについて確かなことをいう自信はまったくないが、しかし、ハーンが袂の袖にかくされた顔を美しいと感じたことは確かだし、またこの姿態を日本人の微笑とむすびつけて考えていたのは、なるほど鋭い観察だったと思われる。

ハーンはさきの話につづけて次のように言っている。「わたしの家で長年使っていた下男があつたが、この男のことを、わたしはふだんからしごく快活な、<sup>a</sup>後生楽な男とばかり思っていた。物を言いかけると、この男はいつでもけらけら笑っている。

(中略)ところが、ある日のこと、この男が自分ひとりであるときに、わたしはそつとのぞいて見て、まるでこの男が気のゆるんだ顔をしているのに驚いたことがある。いままでこつちが知っていた顔とはまるで打って変わった顔つきなのだ。心の痛みと腹立ちのこわい皺があらわれて、年が二十も老けて見えた。わたしはエヘンと咳払いをして、自分のいることを知らせてやった。すると、たちまちその顔がやわらいで、まるで若返りの奇跡にあつたようにはつと明るくなったのである(同上)

ひとは「この男」のこの笑いをどう解釈するか。

A

と攻撃するか。それともお世辞笑いの欺瞞<sup>ロ</sup>を指摘するか。それと

も、例によつての不可解な日本人の笑いをうんぬんするか。ハーンはちがう。彼は言っている。「これなどは、じつに、ふだん自分を殺しつけている自製の奇跡である」。わたしもこれと同じ考えである。日本人の笑いは主として自製の笑いであると思う。自制がさらにきびしいばあいには、その笑いすら、袂の袖でかくしてしまう。高らかに笑うことが不自然であると人が感じるとき、笑いはこのように抑制的なものとなった。

微笑つまりエミと、それからワライとの区別をきびしくつけたのは柳田国男であった。ワライにはかならず声があり、エミには少しもない。ワライのばあい、時には相手に不快感を与える。やさしい気持ちの伴っていないワライもある。それに反し「エムには如何なる場合にもそういうことがない。是が明らかなる一つの差別であつた」(「女の咲顔」)

つまり柳田説によると、一座の中で笑っている人がジャツカンおり、それとの同調でホホエンでいる人が、笑う人よりもつと数多くいたのだ。公然たる笑いではなく、むしろ「笑う人に向つての一種の会釈」だつたという。「こんなことに笑いこけるのは、はしたないと内心では思つても、自分ばかりつんとしていては、反感を表示したことになる。人が楽しみ又はいい気になつている場合が、ことにまわりの者のエガオの必要な時だつたので、是を雷同付和とは誰も見ていないのである」(同上)

笑いがもし哲学的解釈を必要とするむづかしい現象だとすれば、微笑は社会心理学的——それもきわめて微妙な——解釈を必要とするむづかしい現象だ。

個人差——というようなことは今はさておいて、ハーンや柳田が提示したような微笑、これは日本人固有のものだろうか。あの意味ではそうではないと思う。私の出会つた数少ない国々の人は、やはり共感の微笑をもらす。フランス語の *sourire* ということばは、ほとんど正確に日本語の微笑にあたる。

イギリスのかなり格式ばつたパーティーで、日本婦人が笑い——それもおそらくは微笑をかくすべく口もとを手でおおつたところ、それがはなはだ非礼としてとがめられたという話があるが、真偽のほどはどうであらうか。顔にしよつちゆう手をあてることが作法になつていないことは当然であらうが、しかし、笑いをかくす動作を、もしかりに不作法だと思ふ人がいたとすればかなり人間の表情とその表現について鈍感な人ではあるまいか。

会釈としての微笑はおそらくどの国の人びとにも共通の表情である。とはいっても、たとえばさきに行ったフランス語の *sourire* には人を小馬鹿にしたうすら笑いという意味もあり、われわれの「微笑」にはそのような意味はすこしもないことには注意しなければならぬ。つまり、会釈としての微笑は、わが国では社会にひろく行きわたった自制としての微笑となっている。これは「文化」として、わが国にははつきり定着しているということだ。

だから、私たちは文化にしたがって人の微笑の意味を正確に読みとるが、それは文化を異にする他国の人には、かならずしも正しく通じはしないことである。

柳田国男は微笑をけつして付和雷同の笑いではないといった。たしかに人につられて笑うといったものではないが、しかし、他人との同調がほとんど B とみえるくらいごく自然に行なわれている社会での、これは目立った表情なのである。

私たちは長いあいだ微笑しつづけてきた。とりわけ「目上」の人に対して。それは、ほとんど第二のテンセイである。

会釈としての微笑、これは外国人に理解される。しかし自制としての微笑、これは時にひとを感動させ、ときにひとをまどわせる。しかも、私たちは、自制としての微笑から、さらに内に屈折し、複雑化した「微笑」の笑いに移ってきた。

(多田道太郎『しぐさの日本文化』による)

問一 傍線イ、口の読み方をひらがなで記せ。

問二 傍線ハ、二のカタカナを漢字で記せ。

問三 傍線 a「後生楽な男」とはどういう男か。最も適切なものを次の中から一つ選び、その番号をマークせよ。

- 1 笑い上戸でほがらかな男
- 2 誰に対しても優しく温厚な男
- 3 何事にも楽観的でのんきな男
- 4 来世を信じて精進する信心深い男
- 5 楽しいことは後にして働く真面目な男

問四 空欄 A に入る四字熟語として最も適切なものを次の中から一つ選び、その番号をマークせよ。

- 1 面従腹背
- 2 外柔内剛
- 3 鬼面仏心
- 4 羊頭狗肉
- 5 針小棒大

問五 空欄 B に入る語として、最も適切なものを次の中から一つ選び、その番号をマークせよ。

- 1 抑制的
- 2 自発的
- 3 意欲的
- 4 規範的
- 5 能動的

問六 傍線 b「この男」のこの笑いをどう解釈するか」とあるが、筆者はこの笑いをどのように解釈しているか。最も適切なものを次の中から一つ選び、その番号をマークせよ。

- 1 自分の年を実際の年齢より若く見せようとしている。
- 2 主人をだまし、嘘をついていることを隠そうとしている。
- 3 ふだんから自制が働いているかのように取り繕っている。
- 4 自分を抑え、心の痛みや腹立ちなどを見せないようにしている。
- 5 高らかに笑うことが不自然だと感じられ、その笑いを抑えようとしている。

問七 傍線c「笑う人に向つての一種の会釈」とはどのような行為か。その説明として最も適切なものを次の中から一つ選び、その番号をマークせよ。

- 1 はしたないと内心では思っているても、あまりに面白すぎてホホエム行為
- 2 人が楽しみ又はいい気になっている場で、まわりに合わせてホホエム行為
- 3 まわりに笑っている人がいるため、思わずその笑いにつられてホホエム行為
- 4 こんなことに笑いこける人から反感を持たれてはいけな思つてホホエム行為
- 5 まわりの者が楽しんでる場で、エガオが必要とされている時に、付和雷同してホホエム行為

問八 傍線d「自制としての微笑、これは時にひとを感動させ、ときにひとをまどわせる」とあるが、それはなぜか。その理由として最も適切なものを次の中から一つ選び、その番号をマークせよ。

- 1 自制としての微笑は、けつしてつられて笑うといった付和雷同の笑いではないため。
- 2 自制としての微笑は、他人との同調がごく自然に行われている社会においては、目立った表情であるため。
- 3 自制としての微笑は、日本固有のものではなく、他の国にも共感の微笑としてひろく行きわたっているため。
- 4 自制としての微笑は、伝統的なつつしみの表現であるが、この微笑がはっきり定着していない文化もあるため。
- 5 自制としての微笑には、フランス語の *sourire* のように人を小馬鹿にしたうすら笑いという意味は含まれないため。

(三)

次の文章を読み、後の問に答えよ。

嗟峨に、能説房と云ふ説教師有りけり。随分弁説の僧なりけり。隣りに沽酒家こしゆかの徳人aの尼ありけり。能説房、きはめたる愛酒にて、布施物を以て、一向に酒を買ひて飲みけり。ある時はおきのりて、布施出くればやりけり。

この尼公、仏事する事有りけるに、能説房を導師に請じければ、近き辺りの者、是を聞きて、能説房に申しけるは、「この尼公の、酒を売り候ふ一の難には、水を入れて候ふ程に、思ふほどbもなし。今日の御説法の次ついでで、酒に水入れて売るが、罪なる事、こまやかに仰せられ候へ。我々が為も然るべく候ふ」と云ふ。

能説房申しけるは、「各々仰せられぬ先に、法師も打ち存じて候ふぞ。今日、日來ひじろの本意開くべし」とて、仏經の釈はただ大方計りにて、酒に水入るる罪障を勸進して、少々は、無き事までこまやかに云ひけり。

さて説法を畢りて、尼公、その辺りの聴衆を皆呼びて、大きな桶に、たぶらかに酒を入れて、とり出て勧めけり。能説房、上座して、盃とりあげて呑みけり。この尼公、「浅猿あせまく候ひけるかな。酒に水入るるは罪にて候ひけるをも知らで」と云ひければ、「水の少し入りたるだにもよし、今日はいかに目出たからん」と思ふ程に、能説房、「あつ」と云ひければ、「いかに」  
と、感ずる声かと聞くほどに、「日來はちと水くさき酒にてこそ候ひしに、是は、ちと」  
A  
にて候ふは、いかに」と云ひければ、「さも候ふらん。酒に水入るるは罪と仰せられ候ひつる間、是は水に酒を入れて候ふ」とて、大なる桶に水を入れて、酒を一ひさげばかり、入れたりける。この尼公、興懷fにしたりけるにや、また、美まことに心得たりけるにや。

『沙石集』による

〈注〉

沽酒家…酒屋。

おきのりて…ついで買って。

勸進…例を挙げて説明すること。

たぶらかに…たつぷりと。

上座して…上座に座って。

ひさげ…手提げと注ぎ口のついた鍋に似た容器。

問一 傍線 a「徳人」の解釈として最も適切なものを次の中から一つ選び、その番号をマークせよ。

- 1 徳の備わった人
- 2 富裕な人
- 3 布施をする人
- 4 不正をする人
- 5 欲張りな人

問二 傍線 b「今日」の読み方の歴史的仮名遣いによる表記として正しいものを次の中から一つ選び、その番号をマークせよ。

- 1 きよう
- 2 きやう
- 3 きやふ
- 4 けう
- 5 けふ

問三 傍線 c「こまやかに」の反義語を本文中より抜き出せ。

問四 傍線 d「知らで」と傍線 e「思ふ」のそれぞれの主語として最も適切なものを次の中から一つずつ選び、その番号をマークせよ。

よ。同じ番号は一度しか選べない。

- 1 能説房
- 2 尼公
- 3 近き辺りの者
- 4 法師
- 5 その辺りの聴衆

問五 空欄 A に入る最も適切な表現を次の中から一つ選び、その番号をマークせよ。

- 1 したりけん
- 2 よかりけん
- 3 よかるらん
- 4 あしかりけん
- 5 あしかるらん

問六 空欄 B に入るべき表現を記せ。

問七 傍線 f「この尼公、興懐にしたりけるにや、また、実に心得たりけるにや」の解釈として最も適切なものを次の中から一つ選び、その番号をマークせよ。

- 1 この尼君は、面白がって洒落でしたのだろうか、それとも、本気で考えたのだろうか。
- 2 この尼君は、だましてやろうと思っただのだろうか、それとも、本当の善意でしたのだろうか。
- 3 この尼君は、深い思惑があっただのだろうか、それとも、ちよつとした出来心でしたのだろうか。
- 4 この尼君は、やりこめようと思っただのだろうか、それとも、本当に大真面目でしたのだろうか。
- 5 この尼君は、からかってやろうと思っただのだろうか、それとも、本気でいさめようと思っただのだろうか。

問八 『沙石集』の編者は誰か。次の中から一つ選び、その番号をマークせよ。

- 1 平康頼
- 2 鴨長明
- 3 橘成季
- 4 慶政
- 5 無住